

令和元年6月15日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03413

研究課題名（和文）現代日本語と韓国語の省略現象に関する対照研究 言語構造的特徴の解明をめざして

研究課題名（英文）A contrastive study of ellipsis in Japanese and Korean: toward an explanation for linguistic structures

研究代表者

生越 直樹 (Ogoshi, Naoki)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：90152454

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、類似する構造を持つ日本語と韓国語について、様々な省略現象（名詞止め文、述語省略、ウナギ文、複文での主節省略、SNSにおける省略現象）を分析することによって、両言語の特徴を明らかにしようとした。分析結果から、日韓両語で省略現象の現れ方に違いが生じるのは、日本語の言語単位が高い独立性及び結合性を持つのに対し、韓国語の言語単位は独立性が弱く、一旦言語単位の融合性が成立するとなかなか崩れにくいためであることが明らかになった。このことから、日本語は比較的分離融合が容易な「磁石」的な構造、一方韓国語は一旦融合すると分離が難しい「チェーン」的な構造とも言うべき特徴を持っていると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

省略現象は語・句・文・談話というあらゆるレベルで観察されるが、これまで十分な研究はなされていなかった。省略現象を通して言語の個別性と普遍性、言語要素と言語外要素の関連性を探るといふ本研究の試みは、これまでにならぬ視点からの研究であり、今回日韓両語を対照分析することによって、両言語における要素間の結びつき方の違いを明らかにすることができた。本研究のアプローチが一定の成果を上げたことは、言語の特徴を明らかにするためには、省略現象の解明が重要であることを示したと言えよう。また、省略現象は自然な言語表現と密接に関連しており、本研究の成果は日本語教育や韓国語教育への影響も大きいと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify some structural features of the Japanese and Korean languages, which display many similarities. We analyzed various kinds of elliptical phenomena such as noun-ending sentences, the truncation of predicates, the Unagi sentences and the omission of main clauses in complex sentences through various texts including social media language. The analyses show that the differences in ellipsis between the two languages are caused by the fact that linguistic units in Japanese tend to act independently and combine easily while this independence is not found in Korean, in which linguistic composition cannot be so easily divided. From this, it can be concluded that the Japanese language displays a structure like a string of 'magnets' and the Korean language like a 'chain'.

研究分野：韓国朝鮮語学、対照研究

キーワード：独立性と結合性 名詞止め文 述語省略 ウナギ文 主節省略 SNSでの省略 「磁石」的な構造 「チェーン」的な構造

## 1. 研究開始当初の背景

韓国語、日本語ともに省略現象に関する本格的な研究は、それほど多くなかったが、日本語研究においては近年、省略を含む「不完全な文」が注目されてきていた。体言止めの文(新屋2014)、言いさし文(白川2009)などを扱う研究のほか、類型論的な考察も行われ(堀江2015)、日本語の構造上の特徴(名詞指向性など)に関しての指摘もなされていた。また、省略という観点ではないが韓国語の非述語文を扱った研究も現れていた(金珍娥2013)。ただし、これまでの研究は、分析の対象が一部に限られており、省略現象を包括的に分析・検討した試みは、管見の限り、見いだすことができない状況であった。

また、省略の様相は各言語によって特徴があり、言語間には相違点と共通点が存在するはずである。例えば英語の場合、日本語と違って主語は省略できないとされながらも、話し言葉では主語やコピュラ、モダリティなどが省かれることが頻繁に起きている(Halliday & Hasan 1976)。同様の現象は、構造的に近いとされる日本語と韓国語でも見られるが、あくまでも各言語の枠内で個別現象として分析されており、日韓対照分析の試みはほとんどなかった。

### 参考文献

新屋映子(2014)『日本語の名詞指向性の研究』

白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』

堀江薫(2015)「日本語の「非終止形述語」文末形式のタイポロジー」『日本語研究とその可能性』

金珍娥(2013)『談話論と文法論』

Halliday & Hasan(1976)*Cohesion in English*.

## 2. 研究の目的

文や談話で「省略」があってもコミュニケーションが成立するのは、その背後に明確な文構造や談話構造が存在し、文や談話全体を支えているからだと考えられる。本研究は、「省略」という普遍的な言語現象が、韓国語と日本語においてどのように実現されるかを調査分析し、その結果を基に、新たな視点から両言語の文構造、談話構造の異同を明らかにしようとするものである。本研究では、語彙から談話に至るまで省略現象を網羅的に扱い、それらのデータを幅広く収集分析し、日韓両言語における省略現象の特徴、および背後で支える文構造、談話構造の特徴を明らかにする。「省略」に着目した本研究での試みは、他の言語の分析にも有効であり、その成果は、言語研究全般に寄与するものであると考える。

## 3. 研究の方法

韓国語と日本語における省略現象の実現様相を調査分析し、背後にある構造的特徴を明らかにするという研究目的を達成するため、以下の手順で研究を行う。

- (1)各メンバーが両言語の様々な言語データを収集・分析し、形態論、統語論、語用論、談話分析など各レベルにおける省略出現の特徴を明らかにする。資料としては、日韓の小説、シナリオ、新聞、TV ニュース、広告、携帯メールやインターネットの書き込み、さらに公開されている大規模コーパスに至る多様な言語データを用いることにより、多角的な分析を行う。
- (2)省略出現の特徴から省略を支える構造について研究者間で検討を行い、両言語の構造上の特徴を統括的に記述・提示することを目指す。
- (3)その成果を研究会や国際シンポジウムで発表し、他の研究者の意見を聞いて完成度を高める。

## 4. 研究成果

本研究では、類似する構造を持つ日本語と韓国語について、様々な省略現象(名詞止め文、述語省略、ウナギ文、複文での主節省略、SNS における省略現象)を分析することによって、両言語の特徴を明らかにしようとした。

分析結果から、以下のことが明らかになった。

- (1)日本語ではコピュラなしで名詞だけで終わる文(名詞止め文)が多用されるが、韓国語ではその使用が制限され、使用に際しては構造の単純さ、相手への強い働きかけ、文の独立性が関与している。それらの要因から考えて、韓国語の名詞止め文は文としてではなく語句的な性格を持つこと、一方日本語の名詞止め文は独立した文として機能していると考えられる。
- (2)日本語では時間的・空間的制約の強いテキストにおいて述語の一部または全部を省略することが効果的な省略の手段となっている。一方で韓国語の場合、述語よりは助詞が省略されやすく、日本語に比べて述語の完全性を重視する傾向がある。
- (3)いわゆるウナギ文は日韓両語とも使われるが、ウナギ文をコピュラの有無、述語にかかる主語の明示性などによって分類した場合、日本語の方が韓国語より多様なタイプのウナギ

文を許容していることが分かった。ウナギ文を、前提される部分が省略された二項名詞文と捉えた場合、日本語では状況的前提しかない場合でもコンピュータを有するウナギ文が使えるのに対し、韓国語ではそのような場合はコンピュータなしのウナギ文しか使われず、コンピュータを有するウナギ文は命題的前提がある場合しか使えない。

- (4) 条件文などで日本語の方が主節省略が起こりやすいのは、日本語が複文構造を容易に単文構造にできるのに対し、韓国語では文構造の完全性を維持しようとするためである。話し手の心的態度を表す言語形式が、日本語では終助詞など独立的なものが存在するのに対し、韓国語は語尾形式しかなく用言の存在を要求するなどの構造的な違いも、複文の単文化における両言語のズレと関係する。
- (5) 日韓 SNS における省略現象を分析すると、日本語は言語単位を他の言語単位と切り離し独立して使用可能であるのに、韓国語では言語単位同士の融合性が強く、自由に切り離すことが難しいことが分かった。後述の日本語の「磁石」的構造、韓国語の「チェーン」的構造は、話しことば、書きことばだけでなく新たなメディアである SNS にも共通して現れることが明らかになった。一方で、その言語構造の現れ方は各 SNS によって異なることも示唆され、メディアによる多様性の存在も明らかになった。

これらの結果を総合すると、日本語の場合、句や節、文などにおいて一貫して述語に関わる省略の傾向が観察されるが、韓国語の場合は述語の形態的・統語的完全性を保とうとする傾向が強い。このように日韓両語で省略現象の現れ方に違いが生じるのは、日本語の言語単位が高い独立性及び結合性を持つのに対し、韓国語の言語単位は独立性が弱く、一旦言語単位の融合性が成立するとなかなか崩れにくいことであることが明らかになった。すなわち、日本語は比較的分離融合が容易な「磁石」的な構造、一方韓国語は一旦融合すると分離が難しい「チェーン」的な構造とも言うべき特徴を持つことを明らかにすることができた。さらに、このような特徴は、語と句の中間的性格を持つ形式が日本語の方でより見られやすいことなど、従来の日韓対照研究で観察されてきた事実とも合致するものである。

この研究成果は、各自が学会等で研究発表や論文掲載の形で公表するとともに、2018年3月に韓国日本語学会で分担者全員が研究発表を行い、韓国の研究者との意見交換を行った。また、2018年9月には社会言語科学学会大会で「省略現象から見えてくること - 「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語 - 」と題したワークショップを行い、各自の研究発表を行った。さらに、2019年3月には、科研成果報告公開シンポジウム「日韓両語の「省略」は何を語るか 言語の個性性と普遍性に向けて」を開催し、3名の招待者（沖裕子、藤井洋子、堀江薫）による講演と分担者各自による研究発表を行い、日本の研究者との意見交換を行った。

従来、省略現象についての日韓対照はあまり研究がなされておらず、本研究によって初めて本格的かつ包括的な研究がなされたと言ってよいであろう。本研究で様々な省略現象を扱ったにもかかわらず、その背景にいずれも両言語の言語単位の結びつき方が関わっていたことは、これまでにない新たな知見であり、その特徴が日韓両語の他の言語現象にも関わっている可能性が高い。また、この言語単位の結びつき方が他の言語の省略現象にも関係している可能性があり、言語の省略現象から言語構造の特徴を捉え得ることを示した点で、本研究の成果は、言語研究や隣接研究分野に大きな影響を与えたと考えられる。本研究チームが韓国、日本で行ったワークショップやシンポジウムには多くの参加者が集まり、活発な意見交換が行われた。ここでは、今回の省略現象の分析が日本語学、韓国語学だけでなく、様々な言語の分析にも有益であることが確認された。

今後は、他の省略現象の分析を進めると同時に、今回の研究で得られた知見が、日韓両語の他の言語現象に適用可能かを考えていく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 16 件)

尹盛熙、日韓の述語と省略 - 構成素の結合様式の違いに関する試論 - 、国際学研究、Vol.8 No.1、2019、1-8

オープンアクセス有 <http://hdl.handle.net/10236/00027512>

金智賢、日本語と韓国語の分裂文の特徴、韓国日本語学会第 39 回春季国際学術大会発表論文集、査読有、2019、96-101

生越直樹・尹盛熙・金智賢・新井保裕、省略現象から見えてくること - 「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語 - 、社会言語科学学会第 42 回発表論文集、査読有、2018、236-245

生越直樹、日韓対照研究の実践と課題—名詞文の使い方を例に—、日本語学研究、査読有、57号、2018、5-14

DOI:10.14817/jlak.2018.57.05

尹盛熙、日韓の省略の違いについて - 省略の個別言語的・普遍的方向性に関する試論 - 、韓国日本語学会第 37 回国際学術発表大会発表論文集、査読有、2018、12-15

金智賢、条件語尾終結文に関する日韓対照研究(原題韓国語) 言語科学研究、査読有、85、2018、99-119  
DOI : 10.21296/jls.2018.06.85.99  
金智賢、条件文主節の省略現象に関する日韓対照研究、韓国日本語学会第 37 回国際学術発表大会発表論文集、査読有、2018、16-22  
金智賢、韓国語と日本語のコピュラとコピュラ文に関する対照研究(原題韓国語) 第 45 回国語学会全国学術大会発表資料集、査読有、2018、57-68  
新井保裕、Twitter を中心としたSNS における省略現象の日韓対照研究: 言語とメディアの関係を探る、韓国日本語学会第37回国際学術大会発表論文集、査読有、2018、23-31  
新井保裕、省略現象の背後にある日韓言語構造の違いに関する一考察—Twitterの一つの省略現象に注目して—(原題韓国語)、中国韓国(朝鮮)語教育研究学会2018年度定例学術会議発表集、査読有、2018、482-491  
尹盛熙、日本語と韓国語の名詞連結構成 —見出しにおける「主体」と「事件」について—(原題韓国語)、日本學報、査読有、第112輯、2017、45-67  
オープンアクセス有  
[http://www.kaja.or.kr/html/sub2\\_01.html?pageNm=article&journal=1&code=315675&issue=23716&Page=1&year=2017&searchType=title&searchValue=](http://www.kaja.or.kr/html/sub2_01.html?pageNm=article&journal=1&code=315675&issue=23716&Page=1&year=2017&searchType=title&searchValue=)  
尹盛熙、述部に見られる「機能」と「役割」- TV アニメにおける機能語の省略、日本語用論学会第20回大会発表論文集、2017、177-182  
尹盛熙、話し言葉における省略、国際学研究、査読無、Vol.6 No.1、2017、87-92  
オープンアクセス有 <http://hdl.handle.net/10236/00025580>  
金智賢、条件文主節の省略現象に関する日韓対照研究(原題韓国語) 言語科学会冬季学術発表大会発表論文集、査読無、2017、229-246  
金智賢、原因・理由接続文の主節省略に関する韓日対照研究(原題韓国語) 言語科学会夏季学術発表大会発表論文集、査読無、2017、258-268  
尹盛熙、日本語の翻訳字幕における省略・縮約の実現 韓国語との対照分析、社会言語科学、査読有、18巻2号、2016、19-36

[学会発表](計 18件)

生越直樹、日韓対照研究の実践と課題 —名詞文の使い方を例に—(基調講演) 韓国日本語学会(ソウル) 2018  
尹盛熙、引用動詞表現の省略に関する一考察 - 省略から文法化へ -、日本語用論学会第 21 回大会、2018  
金智賢、分裂文から見る日韓のコピュラの特徴、日本言語学会第 157 回大会、2018  
尹盛熙、日本語の述語における機能語の省略について、社会言語科学会第 39 回大会、2017  
Sunghee Youn、Ellipsis: Strategies for Efficiency in Japanese and Korean、EAJS (European Association of Japanese Studies) 15<sup>th</sup> International Conference (Lisbon)、2017  
尹盛熙、韓日の動詞性名詞における漢字構成素 - 語の中の統語的要素に関する一考察、韓国日本学会第 94 回国際学術大会(ソウル)、2017  
金智賢、二項名詞文における「ita」の意味機能について—日本語の「だ」との対照分析から—、第 68 回朝鮮学会大会、2017  
新井保裕、コミュニケーション研究を活用した韓国語教育—日韓対照研究とメディアに注目した教育実践報告—(原題韓国語)、2017 中国韓国語教育発展フォーラム、2017

[図書](計 1件)

生越直樹、日本語と韓国語の属格助詞の用法について(原題韓国語) 大学社、宋喆儀教授退任記念 國語學論叢(共著) 2018、201-221

[その他]

科研費成果発表公開シンポジウム『日韓両語の「省略」は何を語るか 言語の個別性と普遍性に向けて』、2019年3月4日開催  
生越直樹、日韓の名詞止め文の現れ方  
尹盛熙、「省きましたが何か？」日韓の省略・述語・テキスト  
金智賢、日本語と韓国語のウナギ文について  
新井保裕、SNSにおける省略現象の日韓対照研究 メディアに現れる「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：新井保裕

ローマ字氏名：Yasuhiro Arai  
所属研究機関名：東洋大学  
部局名：国際教育センター  
職名：助教  
研究者番号(8桁)：40612388

研究分担者氏名：金智賢  
ローマ字氏名：Jihyun Kim  
所属研究機関名：宮崎大学  
部局名：語学教育センター  
職名：准教授  
研究者番号(8桁)：40612388

研究分担者氏名：尹盛熙  
ローマ字氏名：Sunghee Youn  
所属研究機関名：関西学院大学  
部局名：国際学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：70454717

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。